

地域の象徴としてのグリーンベルトと地域社会の意識 —函館市のグリーンベルトを事例として—

片柳 勉* 中園 翔太* 望月 優兆*

キーワード：グリーンベルト、大火、象徴、意識、函館市

1. はじめに

地域には歴史や風土を象徴しうる事物が存在し、地域のアイデンティティ形成に大きく関わっている。運河や橋梁、塔などの巨大構造物はその存在感ゆえに地域の歴史の象徴となるものもある。その例として利根川と江戸川を結ぶ利根運河（1890年開通）、関東大震災の記憶を伝える隅田川の現・永代橋（1926年竣工）、高度経済成長期に建てられた東京タワー（1958年竣工）などがあげられよう。

巨大構造物のなかで、防災施設もまた地域の象徴となりうるものである。新潟県旧分水町（現・燕市）にある大河津可動堰（1931年完成）は供用開始から80年以上にわたり越後平野を水害から守ってきた。老朽化が進んだため下流側に新可動堰が建設されたが、旧可動堰は地域のシンボリック的存在となっている。また、名古屋市中心部にある二つの幅員100m道路、久屋大通と若宮大通は第2次世界大戦後に防火帯として造られたが、大戦中の名古屋空襲とその後の戦災復興計画の象徴といえよう。その後、久屋大通では都市公園化と地下街の整備が進み、名古屋市におけるシンボルゾーンとなった（津川，2003）。

防災施設の多くは地域の負の記憶を想起させる一方で、実用的なものとして地域が困難を乗り越えてきた証でもある。したがって、防災施設を地域遺産としてとらえ、個々の防災施設の置かれた状況、当該防災施設に対する地域社会の意識を明らかにすることは、今後のまちづくりを考えていくうえで重要と考える。片柳ほか（2009）は、和歌山県広川町の広村堤防を取り上げ、津波防災の施設として建設された堤防が津波の記憶を伝える装置としての役割を果たしつつ地域のシンボリックなものに変化したことを明らかにした。しかし、上記のような視点から防災施設を取り上げた研究はいまだ少ないのが現状である。

そこで本研究では、もともとは防火機能を重視して市街地に設置された函館市のグリーンベルト¹⁾を対象とし、地域社会の意識を通してその象徴性について考察する。本研究で対象とする函館市のグリーンベルトは、1934（昭和9）年の函館大火後の復興事業で防災機能を持つ施設として設置されたもので（図1）、その後は、消防体制の整備等により同市は大火に見舞われることが少なくなった。グリーンベルトの防災施設としての役割は以前よりも小さくなったかのようにも見える。しかし、函館市のグリーンベルトが大火の結果として建設されたことは紛れもない事実である。地域の人たちはグリーンベルトに対してどのような意識を持っているのか。本研究では、大火とグリーンベルトに対する地域住民の意識が変化し、グリーンベルトが防災施設から他の機能を有するものへと変化しているのではないかと仮説のもと、グリーンベルトをとりまく周辺環境の変化を考慮しつつ、グリーンベルトに対する地域社会の意識について明らかにすることを目的とする。

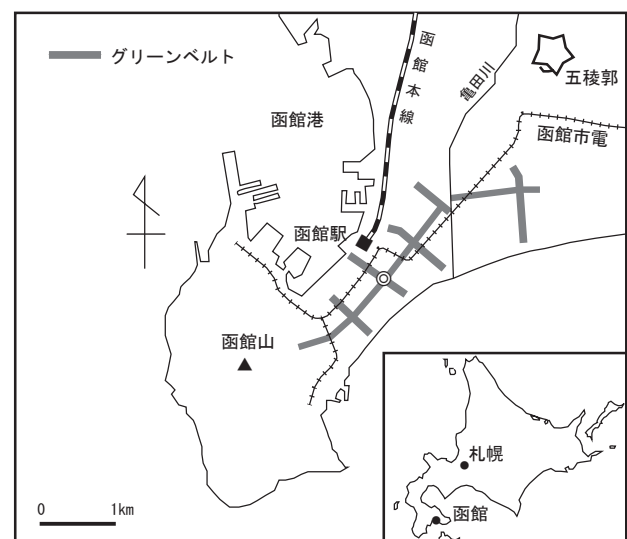


図1 研究対象地域

* 立正大学地球環境科学部

本研究は、以下の手順で進める。まず、大火と復興事業の関係性を整理するとともに、函館大火後の復興事業関連施設をとりまく状況の変化を通じて大火の記憶の継承について考察する。次に、グリーンベルトの利用形態の変化について、文献資料・地形図および景観観察により明らかにする。さらに、周辺の住民に対する聞き取り調査によりグリーンベルトに対する住民の意識を把握する。以上の結果を踏まえ、グリーンベルトに対する地域社会の意識を考察する。なお、現地調査は2011年6月に実施した。

2. 大火と復興事業の経緯

函館は明治・大正期を通じて北海道最大の人口を有する都市であったが、幾度となく大火²⁾に襲われてきた。函館市消防本部の資料（函館市消防本部ホームページ）によれば、函館市では大火は明治・大正期に28回を数えたが、焼失戸数が500戸以上あったものだけでも15回発生している（表1）。そのうち9回が明治期に発生したものである。なかでも1907（明治40）年に発生した火災は焼失戸数が12,390戸、罹災面積40万坪にのぼるもので、当時の函館市の中心部である西部市街地のほぼ全域を焼失する大火災であった（図2）。大火の発生回数は大正期に入ってから減ることはなく、500戸以上を焼失する大火が大正期だけで5回発生している。1921（大正10）年に発生した大火では、明治40年の大火で焼失した区域の南

半分が再度被災している。

明治・大正期を通じて頻発した大火であったが、そのつど防火対策を目的とした復興事業が行われ、現在の函館西部地区に見られる直交型街路を有する都市の骨格が造られた（越沢, 2005）。また、函館西部地区に見られる幅員36m（20間）の基坂と二十間坂は、1879（明治12）年の大火後の復興事業で拡幅整備されたものである。大正10年の大火後には、復興事業として銀座街火防線が建設され、市街地における防火線が強化された。その後、銀座街は大正後期から昭和初期にかけて函館の中心繁華街として賑わった。

昭和期に入り、函館史上最悪の被害をもたらす火災が町を襲った。1934（昭和9）年3月21日午後6時53分に市街地南端付近の住吉町から出火した火災は市街地全域に拡大するもので、後に「函館大火」と称された。死者2,166名、被災世帯は22,667にのぼった。この時の大火で当時の函館市の約3分の1にあたる416.39haが焼失し、11,105棟の建物が失われた（図3）。大火後、直ちに復興計画が立てられた（坂口ほか, 1988）。焼失区域を中心に、幅55m（30間）と36m（20間）の広幅員の道路がグリーンベルトとして建設された。また、グリーンベルトの末端や交点には公園や耐火建築の小学校・官公署が配置された。これ以降、消防体制の整備もあり、焼失戸数500戸を超える大火はみられなくなった。

表1 函館における主な大火と復興事業・防火対策

年 月	焼失戸数	大火後の主な復興事業・防火対策
1869（明治2）. 5	872	
1871（明治4）. 9	1,123	
1873（明治6）. 3	1,314	
1878（明治11）. 11	954	道路の直通化と拡幅
1879（明治12）. 12	2,326	道路の直通化と拡幅、防火線として基坂と二十間坂を拡幅、耐火建築化の推進
1896（明治29）. 8	2,280	
1899（明治32）. 9	2,494	
1907（明治40）. 8	12,390	火災予防組合の設立
1912（明治45）. 4	733	
1913（大正2）. 5	1,532	火災予防組合連合会を組織、火防設備期成同盟会の設立
1914（大正3）. 4	849	
1914（大正3）. 12	673	火防調査委員会の設置
1916（大正5）. 8	1,763	
1921（大正10）. 4	2,141	火防設備実行会を組織、銀座街火防線の建設
1934（昭和9）. 3	11,105	復興土地区画整理事業の実施、グリーンベルトの建設、復興小学校の建設

注) 焼失戸数500戸以上のみの大火を掲載。1934年の函館大火では焼失建物棟数を記載。

（函館市消防本部ホームページ、函館市史編さん室編（1990,1997,2002）より作成）

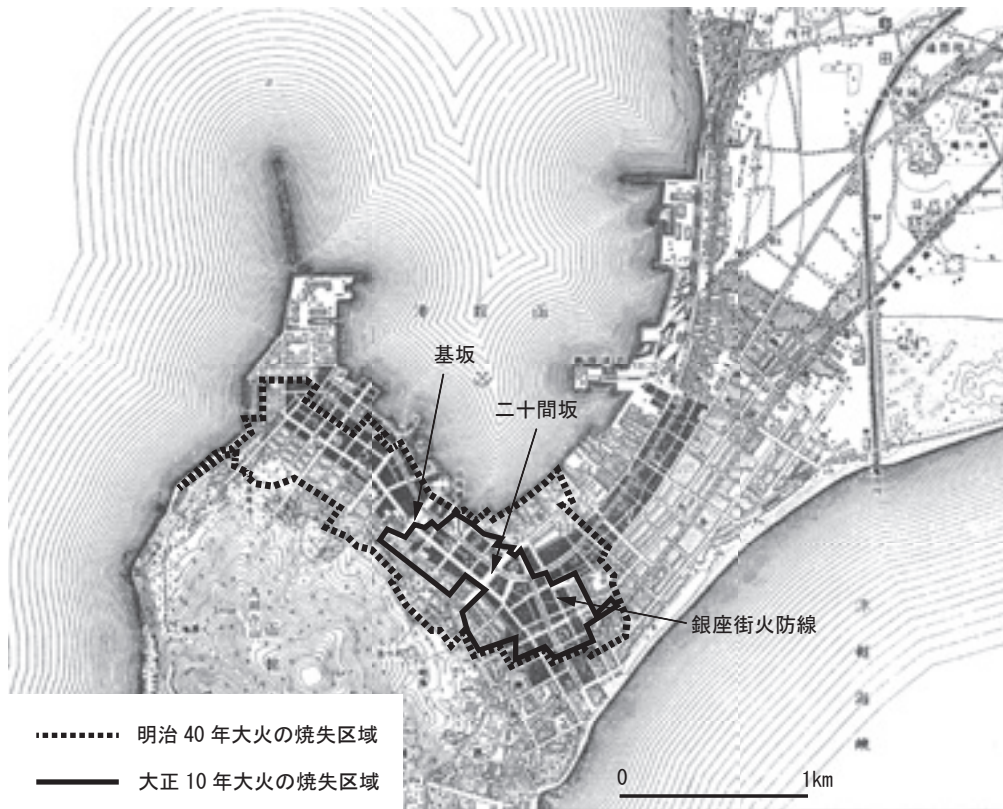


図2 明治40年大火・大正10年大火での焼失区域
(25,000分の1地形図「函館」(昭和6年鉄道補入)、函館市史編さん室編(2007)より作成)



注) 公園・耐火建築物はグリーンベルトの末端・交点に位置するもののみを記載。
図中の番号は写真1～3の撮影位置を示す。

図3 昭和9年函館大火での焼失区域とグリーンベルト
(25,000分の1地形図「函館」(平成22年更新)、函館消防組(1934)より作成)

3. 函館大火の記憶の継承

西部地区にある広幅員の坂道、市街地に張り巡らされたグリーンベルトをはじめとして、函館市には大火の記憶を継承する施設が数多くみられる。しかし、1934（昭和9）年の函館大火も遠い過去の出来事になり、また、函館大火後の復興事業で建てられた建物で80年近く、それ以前の明治・大正期の大火後の復興事業で建てられたものでは100年近くが経過し、ほとんどの建物で老朽化が進んでいる。なかには取り壊される建物もあり、それにともない大火の記憶も薄れつつあるようにみえる。

函館大火後の復興事業では、避難場所の役割を持った復興小学校がグリーンベルトの末端や交点付近などに建設されたが³⁾、そのうち東川小学校が2001年3月31日に閉校した⁴⁾。閉校後の校舎については、取り壊しに反対する運動があったが、一部保存が検討されることもなく2002年に解体された。函館市内には旧東川小学校校舎の解体に反対する看板（写真1）が残っている。看板には東川小学校校舎の保存理由として「1. 浜風を防ぐ防火対策の一環である。2. 避難場所。3. 文化財に登録できる学校である。4. 多くの団体の人々が利用したいと願っている。5. 東川文化センターとしての環境が整備されている。6. 昭和五十九年修復されている。7. 全国の人々より大火の復興に義援金を使用されている。8. 解体費用1億3520万円もかかりその1/3で修復可能。」と記されている。校舎の解体は少子化と建物の老朽化によるものとはいえ、函館大火とその後の復興事業を伝える建物として貴重なものであった。その後、東川小学校跡地は函館市から北海道に譲渡され、跡地では道営住宅「であえーる大森浜団地」が建設中である⁵⁾。



写真1 旧東川小学校校舎解体に反対する看板（護国神社坂上）
（2011年6月、片柳撮影）

復興小学校のほかには函館大火の記憶を伝える建物として、大火の2年後に完成した大火遭遇記念慰霊堂（函館大火慰霊堂）がある。慰霊堂では毎年3月21日に慰霊法要が行われ、大火の記憶が引き継がれている。2011年3月21日には第78回忌慰霊法要が行われ、犠牲者の遺族や大火の被災者、市職員ら73人が参列した（函館新聞社NEWS WEB）。函館大火の記憶の一部は、慰霊堂と慰霊法要を通じて現在に継承されているといえよう。

4. グリーンベルトの土地利用形態

グリーンベルトの第1の機能は防火であり、そのために緑地を備えた広幅員の道路として計画され、建設後に植樹が進められた⁶⁾。しかし、日常生活空間に存在するグリーンベルトの土地利用形態は多様である。

函館市史（函館市史編さん室編、2002、p844）には、第2次世界大戦後に大門広小路に屋台の店が並んだこと、1960年代後半に自動車の普及にともない駐車場に利用するものが現れたこと、中心部の交通混雑を緩和するために一部のグリーンベルトを潰して有料駐車場の設置が計画されたことなどが記されている。これらの記述からは、函館市が都市として発展するなかで、市街地中心部に位置するグリーンベルトが防火施設としてよりも、むしろ未利用地として認識されていた当時の状況がうかがえる。

高度経済成長期とその後のバブル経済期を経て、グリーンベルト沿いの市街地は大きく変化してきたが、グリーンベルト自体の利用形態に大きな変化は見られない。木村ほか（2002）は2001年6月にグリーンベルトの調査を行い、グリーンベルトの全区画が設置当時のまま残っていたこと、グリーンベルトの利用形態が周辺市街地の土地利用に影響され、住宅地内では公園・広場としての利用が多いことを報告している。2011年6月に筆者らが実施した調査では、2001年時点と同様にグリーンベルトの全区画が残り、利用形態に変化が見られないことが確認できた。概観すると、広路と称されるグリーンベルトの北西側（函館港側）ではほぼ全体を広幅員道路（写真2）として、南東側（大森浜側）は中央部分を公園ないし広場として利用している箇所が多く見られた。また、市街地を南西から北東に貫くグリーンベルトでは、走行分離帯として中央部に植樹された緑地ないし公園を配し、その両側が一方通行の2車線道路とされている（写真3）。

函館市のグリーンベルトは、復興計画で期待された防火帯としての機能を失うことなく、その大部分が都市内の幹線道路・緑地として利用されている状況にある。



写真2 東雲広路の景観（函館市役所前）
（2011年6月，片柳撮影）



写真3 高田屋通の景観（高田屋敷跡付近）
（2011年6月，片柳撮影）

5. グリーンベルトに対する地域住民の意識

本章では、グリーンベルトに対する地域住民の意識を通じて、グリーンベルトと地域における函館大火の記憶の継承との関係について考察する。住民意識については、グリーンベルト周辺の居住者に対して行った聞き取り調査の結果から分析する。

回答者は60代と70代が多数を占めた（表2）。これは調査が平日の日中であったためである。また、函館における居住年数については、回答者のほとんどが20年以上であった（表3）。高齢の回答者が現住地で生まれて現在に至っているケース、もしくは市内で転居したケースがほとんどであった。

表4は1934（昭和9）年の函館大火について質問した回答結果である。函館大火を「よく知っている」と答えたものは5名いた。「知っている」「少し知っている」の回答を合わせると18名で全体の4分の3が函館大火につ

表2 回答者の年齢

	男性	女性	合計
1. 30代	0	1	1
2. 40代	0	2	2
3. 50代	2	0	2
4. 60代	4	7	11
5. 70代	5	2	7
6. 80代	0	1	1

聞き取り調査により作成

表3 函館での居住年数

	男性	女性	合計
1. 5年未満	1	0	1
2. 10年未満	0	0	0
3. 20年未満	0	2	2
4. 20年以上	10	11	21

聞き取り調査により作成

表4 函館大火についての認識

	男性	女性	合計
1. よく知っている	3	2	5
2. 知っている	4	0	4
3. 少し知っている	2	7	9
4. 知らない	2	4	6

聞き取り調査により作成

表5 防火線としてのグリーンベルトの存在についての認識

	男性	女性	合計
1. よく知っている	6	5	11
2. 知っている	1	1	2
3. 少し知っている	3	4	7
4. 知らない	1	3	4

聞き取り調査により作成

表6 グリーンベルトの必要性についての認識

	男性	女性	合計
1. 必要	9	8	17
2. 不必要	2	4	6
3. どちらとも言えない	0	1	1

聞き取り調査により作成

表7 グリーンベルトの認識と必要性との関係

	1. 必要	2. 不必要	3. どちらとも言えない	合計
1. よく知っている	10	1	0	11
2. 知っている	1	1	0	2
3. 少し知っている	5	2	0	7
4. 知らない	1	2	1	4
合計	17	6	1	24

聞き取り調査により作成

表8 グリーンベルトに対する意見

性別・番号	年代	必要性	意見	防災施設	公園・緑地	備考
男性1	50代	1	防災としてあった方がいい。	○		
男性2	50代	2	昔ほど火事が起きないので必要ない。			
男性3	60代	1	公園や緑があった方がいい。防災としても必要である。	○	○	
男性4	60代	1	道路だと嫌だ。緑があると落ち着く。		○	
男性5	60代	1	火の粉が飛んで来ない。大火がまた起こった時、役に立つ。	○		
男性6	60代	1	ゲートボール場。市役所に嘆願して木を切ってもらい、作ってもらった。		○	
男性7	70代	1	住宅状況を考えたら必要。	○		
男性8	70代	2	興味もない（1年前に七飯町から引っ越してきた。）			
男性9	70代	1	グリーンベルトは避難道である。	○		
男性10	70代	1	自然として必要。防災としては必要ない。最近火事がないから大丈夫。		○	
男性11	70代	1	公園・自然として必要であるが、防災としても必要である。	○	○	本人が被災
女性1	30代	1	防災でなく公園として必要である。		○	
女性2	40代	1	犬の散歩。いこいの場。都会の中でのくつろげる場所。		○	
女性3	40代	1	よく犬の散歩で使う。昔、子供たちを連れて来ていた。		○	
女性4	60代	3	知らないのでどちらとも言えない。			
女性5	60代	1	高いマンションばかりだから、子供たちと遊べる。ストレス解消。		○	
女性6	60代	1	自然があった方がいい、防災としても必要。	○	○	
女性7	60代	2	生まれていないので知らない。			
女性8	60代	2	（グリーンベルトを囲む）柵はいらない。			
女性9	60代	2	市のものなのに、住民が勝手に花を植えたりする。			
女性10	60代	1	緑がきれい。向かいの家が火事でも大丈夫。	○	○	
女性11	70代	2	グリーンベルトがよく分からない。			
女性12	70代	1	緑があると気持ちよい。風通しがよい。		○	
女性13	80代	1	緑がきれいだから。		○	本人が被災

注) 必要性の項目の数字1～3は表6に対応する。

聞き取り調査により作成

いて何らかの知識を持っているという結果となった。回答者の中には実際に被災した人が2名、両親や知人から大火について話を聞いたと回答したもの、学校で学んで知ったという回答者もいた。高齢者の回答が多かったことから、函館大火は身近に起こった出来事としてとらえられているようである。

次に、防火線としてのグリーンベルトの役割および必要性について質問した（表5、表6）。役割について「よく知っている」と回答したものは11名であった。「知っている」「少し知っている」の回答を合わせると20名にのぼり、回答者の約8割がグリーンベルトの役割を認識していることがわかった。また、全回答者の約7割にあたる17名がグリーンベルトの必要性を認める結果となった。グリーンベルトに対する認識とその必要性との関係を示したものが表7である。これによると、グリーンベルトを「よく知っている」と答えた11名中10名がグリーンベルトの必要性を感じていた。グリーンベルトの認知度が低くなるにつれ、不必要と回答する傾向が見られた。

表8は回答者のグリーンベルトに対する意見を書き出したものである。グリーンベルトが必要と回答した17名は、その理由として8名がグリーンベルトの防火機能をあげ、13名が公園・緑地としての機能をあげていた。防火機能と公園・緑地機能の両方をあげた回答者は4名であった。また、公園・緑地機能をあげていた13名のうち2名は防災上必要と見ていなかった。グリーンベルトを不必要と回答した6名の意見を含めると、火事が減少したので防災上必要と考えなくなった住民（男性2・男性10）、そもそもグリーンベルトの役割について理解していない住民（男性8・女性4・女性7・女性11）がいることが判明した。

聞き取り調査の結果からは、函館大火については知られているものの、地域住民がグリーンベルトの防災施設としての機能よりも公園緑地としての機能に注目している割合が高いことが明らかとなった。グリーンベルトの存在そのものが、函館大火の記憶を地域社会で想起させているとは言えない結果となった。

グリーンベルトは函館大火とその後の復興計画を象徴するものではあるが、地域住民の意識の中では防災機能を有する施設から余暇機能を持つ施設として認識されているといえよう。

6. おわりに

本研究では、函館市のグリーンベルトは地域社会の中で防災機能を有する施設から別の機能を有するものへと変化したのではないかと仮説のもと、グリーンベルトとそれを取り巻く周辺環境の変化を踏まえ、グリーンベルトに対する地域社会の意識について考察してきた。研究の結果は以下のとおりである。

函館市の市街地には、広幅員の坂道、縦横に張り巡らされたグリーンベルト、耐火建築物など、多くの施設が大火後の復興事業で造られてきた。それらは、大火の記憶を継承する施設でもある。しかし、1934（昭和9）年の函館大火は遠い出来事になり、復興事業で建てられた耐火建築物は80年近くが経過して老朽化が進んでいる。そのため取り壊される建物も出てきた。大火の記憶を想起させる建物が減る一方で、函館大火の記憶の一部は、大火慰霊堂における慰霊法要を通じて確実に次世代に継承されている。

函館が都市として発展する過程で、市街地中心部に位置するグリーンベルトは防災施設としてよりも未利用地として認識される時期があった。現在では、グリーンベルトは日常空間に溶け込み、道路や公園緑地として市民に利用されている。

グリーンベルト周辺の住民に対する聞き取り調査の結果からは、住民がグリーンベルトに防災機能を求めるよりも公園緑地としての機能を求める割合が高いこと、グリーンベルトが函館大火の記憶を想起させるものと必ずしも言えないことが明らかとなった。

行政による復興小学校の取り壊しや、地域住民のグリーンベルトに対する意識をみると、火災に対する意識が低下しているようにも見受けられる。とはいえ、グリーンベルトが建設当初から函館大火とその後の復興事業の証として存在し、函館大火を象徴するものの一つであることに違いはない。地域社会の中でグリーンベルトの本来の役割と象徴性が再認識され、大火に関連する他の事物とともに次世代に引き継がれることが、今後のまちづくりを進めていく上で欠かせないと筆者らは考えている。

注

- 1) 本稿でのグリーンベルトは、1934（昭和9）年の函館大火後に市内に建設された緑地を有する広幅員の道路を指す。復興計画では「緑樹帯」と称された。
- 2) 『平成22年版消防白書』の付属資料8「昭和21年以降の大火記録」の注記として、「大火とは、建物の焼損面積が3万3,000㎡（1万坪）以上の火災をいう」と記されている。また、1969（昭和44）年の消防庁告示「消防に関する都市等級要綱」の中で、「大火とは、十棟以上の火災をいう」と定義されている。大火の定義は一定ではない。なお、本稿では「函館の大火史」（函館市消防本部ホームページ）に記載されたものを大火とする。
- 3) 函館市では、1935（昭和10）年から1938（昭和13）年にかけて新川、函館女子、青柳、高盛、東川、的場、大森、弥生の八つの復興小学校が建設された。
- 4) 東川小学校は近隣の大森小学校と統合され、新たに、あさひ小学校が開校した。
- 5) 道営住宅「であえー大森浜団地」は、北海道子育て支援住宅推進方針に沿って建設されたものである（北海道建設部住宅課, 2005）。当然のことながら、方針のなかに防災についての記述はない。
- 6) グリーンベルトの植樹については、函館市内の各婦人団体が「焼けざる函館建設の目的からグリーンベルトは婦人の手で」をモットーに緑樹運動の打ち合わせ会を1935年3月12日に開催、翌年には函館復興緑樹婦人団と銘打って趣意書を全市に配布し、「一人一銭以上一戸十銭以上」の拠金を呼びかけている（函館市ホームページ）。

文 献

- 片柳 勉・田島遙名・古川 恵・辻亜里沙・井川美奈・大芦香織（2009）：地域遺産としての広村堤防の現状と地域社会の意識。地球環境研究, 11, 131-138.
- 木村真由美・駒田貴史（2002）：函館市におけるグリーンベルトの現状。地域研究, 43-1, 33-37.
- 越沢 明（2005）：『復興計画 幕末・明治の大火から阪神・淡路大震災まで』中央公論新社, 270p.
- 坂口美加・室崎益輝・大西一嘉（1988）：昭和9年函館大火の復興計画に関する研究。第23回日本都市計画学会学術研究論文集, 23, 475-480.
- 消防庁編（2010）：『平成22年版消防白書』消防庁, 326p.
- 津川康雄（2003）：都市のアメニティとランドマーク。立命館地理学, 15, 1-13.
- 函館市史編さん室編（1990）：『函館市史通説編第2巻』函館市, 1505p.
- 函館市史編さん室編（1997）：『函館市史通説編第3巻』函館市, 1289p.
- 函館市史編さん室編（2002）：『函館市史通説編第4巻』函館市, 924p.
- 函館市史編さん室編（2007）：『函館市史年表編』函館市,

760p.

函館消防組（1934）：函館大火説明図.

北海道建設部住宅課（2005）：北海道子育て支援住宅推進方針.

函館市 はこだてポスターコレクション

http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/poster/poster_toppage.html（2012年1月22日閲覧）

函館市消防本部 函館消防のあゆみ 函館の大火史

<http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/syoubou/w-hakosho/ayumi/w-ayumi-taikasi.html>（2012年1月15日閲覧）

函館新聞社 NEWS WEB 函新トピック 3月22日

http://www.hakodateshinbun.co.jp/topics/topic_2011_3_22.html（2012年1月22日閲覧）

The Hakodate Greenbelt as Symbol and the Consciousness of the Community

KATAYANAGI Tsutomu *, NAKAZONO Shohta *, MOCHIDUKI Masayoshi *

* Faculty of Geo-environmental Science, Rissho University

Keywords: Greenbelt, Destructive Fire, Symbol, Consciousness of Community, Hakodate City